

F-24 家事労働の変動要因に関する研究(第1報)-大正末期・昭和初期の家事労働-
東京学芸大 大森和子 ○加藤悦

目的 家庭生活とそれにとともなう家事労働は、社会的な要因と内部的な要因によって変動するものである。本研究は、変動要因に関する研究の一つとして、大正末期・昭和初期の頃、東京に住んでいた中流家庭における家事労働の状態を調べ、その時代の経済的背景をふまえて、現代の家事労働と比較考察しようとするものである。

方法 高等女学校(3校)の卒業生名簿から、大正末期・昭和初期の頃、主婦として過ごされた年代の人250名を抽出し、郵送によるアンケート調査を行ない、更に訪問面接による聞きとり調査を行なった。

結果 有効回答数は107である。調査対象世帯の職業は、会社員、公務員、自由業が多く、家事使用人(女中さん)のいた世帯は84%である。主婦の起床時間と就寝時間をたづねた結果から睡眠時間を計算すると8時間台が44%、次が7時間台で大抵適当な睡眠時間がとられている。炊事用燃料は約90%の世帯は都市ガスを使用し、木炭も用いている。給水も水道によるもの83%で、東京に住む家庭の家事は比較的便利であったにもかかわらず、殆どどの家庭でも主婦と女中さんで行うだけの家事の量があった。家事のうち管理的な仕事は主婦が行ない、たとえばそうじのうちぞうきんかけは女中さんだけの仕事、調理は主婦も女中さんもするが、火おこし、みそをする、みそをこすなどは女中さんがするといふ家庭が多い。最も時間をかけた家事は、裁縫が多く、次いでそうじとなっている。洗ひ張り、仕立直し(和服)、子ども作りまじが家庭で行なわれているので、最も時間をかけたのも当然であった。